

「悲しきおもてなしファイターの夜」

○ 梗概

ミニシアター、シネマ・サンライズ浅草橋。或る日の営業終了後、四人の関係者が会議の為にテーブルを囲んだ。議題は、上映開始前に劇場内で流す「鑑賞マナー喚起アナウンス」の文言の考察。アナウンス文章の執筆を託された新入社員、小林弓弦（25）の初稿文章に先ず物言いを付けたのは観客代表として会議に参加していた元スタッフの神宮司香織（28）。「おもてなしの心が伝わらない」と曖昧でも強い一言に小林がたじろぎ文言の修正に追われる様になると、徐々に会議は神宮司の主導権下で進み始める。其の状態に腹の底から納得いかないのは現職スタッフ随一の美声の持ち主であるバイトリージャー長島明（33）、文章が仕上がった末には読み手という大役も控える彼は、かねてより神宮司とは犬猿の仲。神宮司の独裁的な仕事ぶりには昔から辟易としており、此度の会議上でも本来の仕事より神宮寺に反駁することが主な目

的となってしまう。よって会議は当初の予定時間を大幅に超過して紛糾して行く事態となる。『ホスピタリティは過剰なほどに！』と主張する神宮司と、『客を特別扱いし過ぎるな』と訴える長島の対立に終わりが見える気配は無い。二人の対立を泰然自若と見守っていた劇場支配人の円映子（60）は、神宮司が家庭のストレスを会議の場で発散した時も、長島が本業である声優業の不遇から来る不安を会議の場で露呈させた時も、温かくも鋭く「世の中にはたくさんのお解がある。優しい想像力を持つことが重要だ」と宥めた。更に、神宮司と長島の対立に我慢の限界を迎えた小林を慰め、何とかして会議を前に進めようとするのだった。互いが互いに抱いていた感情の棘が幾分か抜けた時、円は「一度、休憩を入れて食事にしよう」と言い出した。少しだけ場所の空気が軽くなったのも束の間、四人は『麺類と言えば何か？』という議題でも論じ始めるのであった。

○ 登場人物

小林 弓弦（25） 映画館スタッフ

神宮司 香織（28） 主婦・元スタッフ

長島 明（33） 現職アルバイトスタッフ

円 映子（60） 支配人

SE・フィルム映写機の稼働音。

やがて、ゆっくりと音が停止する。

× × ×

小林「本日は、シネマ・サンライズ浅草橋にご来場頂きまして誠に有難う御座います。上映開始に際しまして、お客様にお願いが御座います。携帯電話は上映開始前までに必ず電源からお切り下さい。また、上映中の私語は周りのお客様のご迷惑になりますのでご遠慮下さい。また、上映中に前の座席を蹴る行為はお止め下さい。上映中のご飲食は周りのお客様へのご配慮をお願い致します。上映中にお座席を立たれる場合は足元にご注意下さい。それでは、予告編に続きまして本編の上映で御座います。どんな様も、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ下さいませ・・・以上です」

円「良いんじゃない」

神宮司「えっ、本当ですか!？」

小林「ありがとうございます支配人」

円「小林くん、あなた、やっぱり文章を書く才能があるんじゃない？何だか凄く映画館っぽかった」

小林「光栄です！」

神宮司「私はそうは思わないけど」

円「そう？どういった所が？」

神宮司「何て言うか・・・まあ皆さんが良いなら良いんですけどね」

小林「長島さんは如何ですか？」

長島「（とても良い声）僕は与えられた原稿を読むだけです」

円「本当に良い声ね長島くんは、さすが声優さん」

長島「恐縮です」

円「ちょっと一回だけで良いから名前呼んで貰えない？」

長島「ありがとうございます、映子さん」

円「何だか若返っちゃうわ！」

小林「問題が無い様でしたら録音に移りたいと思うのですが」

円「取り乱しました、仕事を進めましょう」

小林「それでは長島さん、宜しくお願い致します」

長島「宜しくお願いします」

円「録音が済んだら、皆で夕飯にしましょうね、今晚は私の奢りです」

長島「ありがとうございます」

小林「何だか申し訳ないですねえ」

円「皆さん遅くまで残ってくれてるんですから、これくらいさせて頂戴」

小林「では、早速録音に移りましょう！」

神宮司「ちよつと良いですか？」

円「どうしたの神宮司さん？」

神宮司「これって、上映前に流すアナウンスですよね」

円「ええ、そうよ」

長島「上映の後に流しても意味はありませんからね」

神宮司「なるほど・・・うーん・・・ちよつと・・・そうかあ・・・」

小林「何か問題ありましたでしょうか？」

神宮司「まあ皆さんが良いなら、別に」

長島「では録音に移りましょう」

円「神宮司さん、どうぞ、ご意見があるなら仰って」

神宮司「私は全体的にイマイチな気がしてて、何だか止むに止まれず仕方なしなシアナウンスしてます感が満載なんですよ」

円「神宮司さんのお気持ちはとても良く分かります、何故ならその通りだから」

神宮司「どうせ手作りするなら、もう少しクオリティは追及しても良いんじゃないですか？」

小林「なるほど、神宮司さんのご意見としては、この文章には改善の余地があるということなんですネ」

神宮司「ごめんなさいね、偉そうに」

小林「とんでもない、色々のご意見を頂けるのは嬉しいです、それではもう少し話し合いを続けましょう」

長島「分かりました、話し合うのは僕も賛成  
です、だけど、こういった話は此処のスタ  
ッフだけで進めるべきだと思うのですが」  
神宮司「それはどういう意味ですか、私だっ  
て此処のスタッフだったんですけど」

長島「三ヶ月前まではね、こう言ってはアレ  
ですが、今は只の部外者ですよね？」

神宮司「私は長島さんよりも長く此処で働い  
てました」

長島「それは関係ない、職場の決め事は、い  
ま現在その職場で働いている人間たちで決  
めるとというのが常識ではないかと思ってい  
るだけです」

円「神宮司さんは私が呼んだのよ、お客さん  
側の意見も必要だと思って」

神宮司「責任を持って参加させて頂きます」  
小林「では、神宮司さんのご意見をお伺いし  
ましょう」

神宮司「私はこの文章にもう少し丁寧さが欲  
しいと思いました」

小林「丁寧さですか・・・」

神宮司「私達の仕事はサービス業です、サ―

ビス業に於ける丁寧さとは、此方側がやや

過剰に感じる程度が丁度良いと思うんです」

円「なるほど、そういう考え方も在るわね」

長島「驚いたなあ」

神宮司「何が？」

長島「あなたは此処で働いていた頃、客の好

き勝手を全て許していたらサービス業は成

り立たないと言ってませんでしたか？」

神宮司「私も辞めてから気付いたですけど、

やっぱり、お客様は神様でした」

長島「これは随分と極端な心変わりだ」

小林「もう少し具体的に聞かせて貰えませんか？」

か？」

神宮司「このアナウンスが流れるということ

は、上映開始時刻が迫って来ているとい

うことですよね？」

小林「仰る通りです」

神宮司「お客様の立場になって考えてみまし

よう、間もなく上映が始まるとなった時に、

お客様が一番気にすることは何か」

小林「えっと・・・やっぱりポップコーンを

買っておいた方が」

神宮司「トイレに行くべきかどうかです」

小林「その通りです！」

長島「行きたいのなら行けば良いじゃないか」

神宮司「間もなく上映が始まりそうだから、

予めトイレに行っておこう、でも待てよ、

もしトイレに行ってる間に本編の上映が始

まってしまったら・・・？」

小林「うん、なるほど」

神宮司「即ちお客様が知りたいのは、予告編

は何分あるのかということなんです」

円「言われてみればその通りね」

神宮司「私ならアナウンスの何処かに”予告

編は5分間となっておりますので、お手洗

は今のうちにお済ませ下さい”という一言

を入れますね」

小林「なるほど！」

円「さすが元バイトリダー！」

神宮司「おもてなしとは、こういうことです」

長島「異議あり」

小林「はい長島さん」

長島「予告が何分あるかなんて、予めロビー

で声掛けしておけば良い話だ、わざわざア

ナウンスで流す必要性を感じませんね」

神宮司「そんなこと言ったら、携帯切れも、

前の席を蹴るなも、全部ロビーで言っとけ

ば良い話なんです、今までも散々やってき

ましたよね、しかし、それでお客様の鑑賞

マナーは良くなったでしょうか」

円「残念ながら改善されてる印象はありません

よね」

小林「それどころかどんどん悪くなって行っ

てる気さえしています」

神宮司「予告の尺まで案内するなんてやり過

ぎだと思いかもしれない、しかし、だから

と言って当たり障りの無い言い方に徹して

いては改善は見込めません、過剰なサービスはお客様に自覚なき安心感を与え、その安心感は安定感に、即ち鑑賞マナーの改善に繋がるのです」

円「もう反論の仕様が無いわね」

小林「神宮司さん、今日から姉さんと呼ばせて下さい」

神宮司「苦しゆうない、苦しゆうない」

神宮司「どうぞ」

長島「これ、録音するんですよね？予告編の尺って作品によって違うじゃないですか、録音素材にしたら対応できないと思うんですけど」

神宮寺「複数のバージョンを作れば良いじゃないですか」

長島「神宮司さんだっってご存知かもしれませんが、予告編の尺というのは映画本編の尺によって変わるんです。一分に満たないものから、一五分近くあるものまで、種類は

実に様々です、その全ての録音素材を用意するんですか？」

神宮司「もう少し頭を使って貰えませんか？」

例えば、予告が五分から十分未満の場合は

“約五分”、十分から一五分程度の場合は

“約十分”、五分未満の場合は“予告わず

か”この様にすれば三パターン作れば良いだけですよね、加えてお客様が本編の上映に遅れることはなくなるじゃないですか」

円「素晴らしいわ」

小林「早速書き直してみます！」

SE・紙にペンを走らせる音。

長島「納得いかないな」

神宮司「どうして？」

長島「三つも素材を用意するなんて非効率だ」

神宮司「あら、声優さんだったら出番は少な

いより多い方が嬉しいんじゃないですか？」

長島「・・・これは声優の仕事ではない」

神宮司「あの一、私、此処を辞めてから皆様の活躍は出来る限り追い掛ける様にしてる

んですよ、映画のエキストラをやったり、  
舞台に出てる人もいますよね、あれ？あれ  
れ？長島さんのお名前ってなかなか拝見し  
ないんですけど、勿論、声優さんとしての  
お仕事はされているんですよね？」

長島「・・・御心配には及びません」

神宮司「安心しました、長島さん今年で三三  
歳ですもんね、全く仕事が無いなんて有り  
得ないですよね」

長島「・・・お気遣い感謝します」

神宮司「頑張ってくださいーい、応援してまーす」

小林「姉さん、書き直してみました」

神宮司「確認します」

小林「お願いします！」

SE・紙が一枚人の手から手へと渡る音。

神宮司「どれどれ・・・本日はシネマ・サン  
ライズ浅草橋にご来場頂きまして誠に有難  
う御座います、上映開始に際しましてお客  
様にお願いが御座います。尚、此方の回は  
予告編が僅かとなっておりますので、お手

洗はお早めにご利用くださいませ・・・なるほど」

小林「途中に差し込むのは少し強引かなと思っただので冒頭に入れてみました」

神宮司「イマイチだね」

小林「え・・・どういったところが？」

神宮司「何だか凄く唐突な気がするのよ、例えばこういうのはどう？今1番シアターで上映してる作品は何だっけ？」

小林「『無職戦隊ヘタレンジャー』です」

神宮司「例えば（喉を整え）・・・本日は、シネマ・サンライズ浅草橋にご来場頂きまして誠に有難う御座います、こちら1番シアターは『無職戦隊ヘタレンジャー』の上映劇場で御座います。こちらの回は予告編のお時間が僅かとなっておりますので、お手洗等の御用はお早めにお済ませ下さいませ・・・こんな感じ」

小林「なるほど」

神宮司「作品名を入れることで、全体的に言葉がスムーズに聞こえる様になると思わない？」

小林「仰る通りです」

神宮司「唐突に予告編が僅かと言われても、お客様の中には戸惑ってしまう方もいると思います、もう少しお客様の気持ちに寄り添って、聞き心地の良いアナウンスになる様に心がけて下さい」

小林「分かりました、では、作品名もアナウンスに入れて、その流れで予告編が何分あるかお伝えしましょう」

神宮司「小林くん、一つ良いかな？」

小林「はい」

神宮司「もう少し自分の頭で考えてくれな  
い？これじゃあ私が文章を考えているのと同じことなただけ」

小林「申し訳ありません・・・」

神宮司「これはあなたの仕事の筈ですよね？」  
小林「申し訳ありません」

神宮司「私は怒っている訳じゃないんです、私の意見を聞いて、小林くんはどう思いますか？何を感じますか？」

小林「何を・・・えっと・・・何だろうな」

神宮司「最もおもてなしの心が伝わるアナウンスとはどういうものだと考えますか？」

小林「そうですね・・・えっと・・・」

神宮司「普段からお客様の心に寄り添って仕事をしていない証拠です、だからこうして質問をされた時に答えられないんです」

小林「申し訳ありません」

神宮司「だから謝るの止めてくれませんか？

私は別に怒ってる訳じゃないんだから」

小林「はい・・・はい、分かりました」

円「ちよつと休憩入れましょう」

神宮司「支配人、私だって暇じゃないんですけど」

円「まあまあ、休憩入れて、小林くんに少し考える時間を差し上げましょう」

神宮司「分かりました、十分後に再開します」

SE・ドアが開き、部屋を出て行くハイ

ヒールの足音。

× × ×

SE・自販機から飲み物が落ちる音。

円「はい、どうぞ」

神宮司「すみません、ご馳走様です」

円「とんでもない、お忙しい中、本当に助かってます、ありがとうございます」

神宮司「喋り過ぎちゃってすいません」

円「少し懐かしい感じがしたわ、貴方が辞めちゃってから良くも悪くもこの劇場は静かになった気がしてたから」

神宮司「小林くんの頼りない感じは相変わら  
ずですね、久々に若い新入社員が入って来  
たから期待してたんですけど」

円「頑張ってはくれてるのよ、少しずつ慣れ  
ていってくれると思う」

神宮司「まあ支配人が良いなら良いんですけ  
どね」

円「神宮司さんの方こそ、新婚生活は如何？」

神宮司「……とっても楽しくやっていますよ」

円「それは何より」

神宮司「まあ不満がゼロって訳じゃないですけどね」

円「それはそうよ、赤の他人が同じ屋根の下で生活を始めるんですから」

神宮司「夫というのは何なんですか？こっちがいちいち指示を出さないと動かない様に設定されている生き物なんですか？」

円「（笑いながら）例えば？」

神宮司「脱いだら脱ぎっ放し、食べたら食べっ放し、血眼で家事をしているのは私だけ、掃除も洗濯も食事の用意も、なに一つ自ら動こうとしない、そのくせ口だけは達者で、もう本当にイライラするんですよ」

円「まあまあ、とりあえず飲みなさいな」

神宮司「ありがとうございます、頂きます」

SE・缶の蓋を開ける音。

× × ×

SE・紙にペンを走らせる音。

小林「本日は・・・有難う御座います・・・  
予告編は僅かと・・・うーん、違うなあ」

長島「・・・小林くんさあ」

小林「はい？」

長島「よくイライラしないでいられるね、あの人と話をしてて」

小林「神宮司さんですか？」

長島「僕、ダメなんだよね彼女」

小林「まあ、何となく噂は聞いてますけど」

長島「一緒に働いている時からああいう感じなんだよ、他人の仕事にいちいち口出して来るし、自分の意見に従わない人間には挨拶すら返さなくなる」

小林「まあ色んな人間がいますから」

長島「苦手なんだよねえ、『私は齒に衣着せず自分の意見を忌憚なく言う人なんで』っていうキャラでやってる人」

小林「分かります」

長島「申し訳ないけど、僕は何一つ神宮司さんの意見に賛同するつもりはないからね」

小林「それはどういう意味ですか？」

長島「とことん反論していくってことだよ、  
どれだけ神宮司さんの意見が正論であつても、僕は彼女の意見を受け入れるつもりは  
微塵も無い」

小林「そんなことしてたら話し合いが終わらない気がするんですけど・・・」

長島「僕は小林さんと支配人の意見なら全て受け入れるから、安心してくれ」

小林「でも・・・」

長島「彼女が今日の主導権を握っている限り、僕はこの話し合いを紛糾させることだけに全力を注ぎたいと思っている」

小林「勘弁して下さいよ、今日中に録音まで済ませて帰りたいんですよ」

長島「それは神宮司さん次第だな」

小林「声優さんの件で何か言われたのが原因なんですか？」

長島「そうじゃない！声優としての仕事はちやんとしているよ、でもそれだけじゃ喰え

てない現状があるのも事実だ。声優としての仕事はしているよ！だけど僕は此処での仕事にも誇りと責任を持っている。声優としての仕事はしているよ！しかし彼女は部外者だ、此処の決まり事はいま此処で働いている人間たちで決めるべきだと思うんだよ。言うておくけど声優としての仕事はちやんとしているんだからね！」

小林「穏便にお願いしますよ・・・頼むから」

× × ×

神宮司「では小林くん、お願いします」

小林「はい・・・今日はシネマ・サンライズ浅草橋にご来場頂きまして誠に有難う御座います、こちらの劇場は『無職戦隊ヘタレンジャー』の上映劇場で御座います。予告編の上映時間が僅かとなっておりますので、お手洗などの御用はお早めにお済ませ下さいませ。上映開始に際しまして、お客様にお願いが御座います。携帯電話の電源は上

映開始前までに必ず電源からお切り下さい。

また、」

神宮司「はい、もう分かりました」

長島「最後まで聞いてあげたらどうですか？」

神宮司「これより先に何か変更ありますか？」

小林「いえ、特には・・・」

神宮司「では結構です、小林くん、これがあ

なたのおもてなし？」

小林「いや、あの、ええっと・・・」

長島「そんな問い詰める様な言い方じゃなくて

も良いじゃないか」

神宮司「今は小林くんと話してるんです」

小林「出来るだけおもてなしの心は意識して

みたんですけど」

神宮司「どういった所に？もう少し具体的に

教えて下さい」

小林「出来るだけ優しい声で、ゆっくりと、

一人一人に語り掛ける様に」

神宮司「それは読む人の仕事です！」

小林「すみません・・・」

神宮司「ちょっと原稿を見せて下さい・・・  
これを読んだ限りだと、さつき私が指摘し  
た部分を、さつき私が指摘した通りに書き  
直しただけで、それ以外は最初と全く同じ  
文章じゃないですか？」

小林「まあ、結果的には・・・」

神宮司「私が言ったこと聞いてたの!？」

長島「彼は色々考えた結果、そこだけ変える  
という結論に至ったんだよ」

神宮司「私にはそうは思えない、ただ何とな  
く指摘された所だけ直して遣り過ごそうと  
した様にしか思えません」

円「まあまあ、じゃあ今のアナウンスについ  
て神宮司さんはどう思ったんですか？」

神宮司「まあ細かい所は色々あるんですが、  
とりあえず三点言いたいことがあります」

小林「お願いします・・・」

神宮司「一つ目、作品名を入れるなら、上映  
開始時間もアナウンスに入れるべきです」

長島「必要ないね」

神宮司「何故ですか？『無職戦隊ヘタレンジ  
ヤー、14時からの回で御座います』こち  
らの方が明らかに丁寧でしょう」

長島「そんなものは屁理屈だ」

神宮司「二つ目！これは個人的な好みの問題  
かもしれないんですけど『携帯電話は電源  
からお切りください』っていう所がね」

長島「まさか携帯電話という単語をスマート  
フォンに統一しろとか言い出すんじゃない  
でしょうね？」

神宮司「確かにそれも一理ありますね」

長島「馬鹿げてる、そんな重箱の隅を突く必  
要はどこにもない」

神宮司「残念ながら私の言いたいことはそこ  
ではなくて、電源からお切りください、こ  
の“から”って何なんですか？」

長島「細かいなあ本当に」

神宮司「私、気になるんですよこういうの、  
コンビニとかカフェの店員も使うじゃない

ですか『千円』から『お預かりします』って、この『から』って何なの？」

長島「何だって良いじゃないか」

神宮司「『から』ということは『まで』があるってことになりませよね？千円からどこ

『まで』お預かりするつもりなの？携帯は電源』から』なに』まで』切れば良いの？」

長島「もう神宮司さんの屁理屈だけを集めた本を出しませんか、劇場の売店で、サイン会とか開いたら賑わうと思うな」

神宮司「私は真面目に話しているんですけど」

長島「良い案だと思いませんか？僕なら買うけ

どなあ、売上も立って一石二鳥だよ」

小林「分かりました、『から』については、気を付けますので」

神宮司「三つ目、トイレに行けと急かすなら、トイレの場所も案内してあげるべき」

長島「ついでに空いてる個室の数も教えてあげたらどうでしょうか」

神宮司「お手洗は劇場を出て右手の通路の奥  
にございます、この一言を入れれば良いだ  
けなんですから」

円「それは確かに良い案かもしれないわね」

長島「過保護が過ぎますよ」

円「まあ、長島くんの気持ちも分かるけど、  
これがお客側のご意見なんですから」

長島「僕に言わせて貰えば、神宮司さんは大  
きな勘違いをしています、過剰なサービ  
ス精神はむしろお客様に不快な思いを与え兼  
ねないと僕は思います」

神宮司「意味が分からない」

長島「神宮司さん、あなた今日のお昼は何を  
召し上がったんですか？」

神宮司「何ですか急に？」

長島「教えて下さい、貴方は今日のお昼なに  
を食べたんですか？」

神宮司「・・・牛丼」

長島「牛丼屋に入って最初にするのは何で  
すか？」

神宮司「話を逸らさないで貰えますか？」

長島「良いから答えて、牛井屋に入ったら、

あなたは先ず何をしますか？」

神宮司「・・・椅子に座る」

長島「椅子の座り方はご存知ですか？」

神宮司「何ですか？」

長島「椅子を自分の少し後ろに置いて、丁度、

膝の裏が椅子に軽く触れる程度の所に置い

て下さい、そしたら、ゆっくりと膝を曲げ

て腰を降ろします、そうすれば椅子に座る

ことが出来るんですよ、さあお客様！お

箸の使い方は大丈夫ですか？井の持ち方は

分かるかな？」

神宮司「あなたは私を馬鹿にしてるんです

か？」

長島「とんでもない！僕はおもてなしの心で

神宮司さんにお伺いしているんですよ」

神宮司「何かめっちゃ腹立ちますよ」

長島「めっちゃ腹立ちますよね？アナウンス

だって一緒なんですよ、やれ携帯を切れ、

やれ喋るな、席を蹴るな、トイレに行け、  
トイレはあっちだ、飯は静かに喰え、もう  
注文ばかりだ！これが本当におもてなし  
の心と言えるんでしょうか？」

円「確かにそういう考え方もあるわね」

小林「初めて真面なこと言った・・・」

長島「ご覧の通り、過剰なサービス精神は、  
むしろお客様を不快にさせてしまう可能性  
を含んでいるんです」

神宮司「今のは長島さんの言い方の問題です、  
わざと私をイライラさせる言い方をした  
じゃないですか」

長島「こちらの思いとは裏腹に受け手が怒り  
出す可能性があることも立証されました」

円「度が過ぎるのも考え物ね」

長島「良いですか？確かにたちの悪いお客様  
はゼロではありません、しかし殆どのお客  
様は僕達が口うるさく何かを言わなくても  
ルールを守って映画をご観賞してくれてい  
るじゃないですか。ごく一部の人の為に

何でもかんでもルールとして押し付けてしまつては、返つて善良なお客様が肩身の狭い思いをすることになるんです」

神宮司「話にならない」

円「で、長島くんはどんなアナウンス文章にしたら良いと思うの？」

長島「小林くんが作った最初の文章で何も問題は無い。確かに今の時代は電話だけでなく時計や指輪まで光る時代ですから、携帯電話は電子機器と言い換えても良いかもしれませんがね」

神宮司「そんなんじや鑑賞マナーはいつまで経つても良くなりません」

長島「ハッキリ言つてこの問題に正解はありません、こちらが何をしても性質の悪いお客様がゼロになることはないでしょう、しかし、それはある程度仕方の無いことです」

神宮司「甘いわ、本当に甘ちゃんだわ」

長島「あなたはお客様の為だと言いながら、

結局は他人に自分の意見を押し付けたい

だけなんだ、違いますか？」

神宮司「ちよっと出てって貰えますか？長島

さんがいると話が進まないんで」

長島「僕はここの現職スタッフだ、出て行く

のは部外者である貴方でしょう！」

円「まあまあ二人共、ちよっと落ち着いて」

長島「あなたは一緒に働いている頃から他人

の仕事にあれこれ口を出して来て、こつち

は心の底から迷惑してたんだ！やっといな

くなつたと思つたら、今度はお客様の代表

みたいな顔をして出て来やがって、もう、

うんざりなんだ！」

神宮司「あんたらが何も分かってないから、

こつちがわざわざ教えに来てやってんじや

ないの！」

長島「余計なお世話だ、あれこれ言いたいな

ら自分の家でやれば良いだろ！」

神宮司「私は蹴りますよ？前の座席、蹴るな  
って言われてないから、映画観てて腹が立  
ったら前の座席を蹴りますよ！？鑑賞マナ  
ーなんか何一つ守りませんからね！」

長島「そんなことをする奴はただの馬鹿だ！」  
神宮司「馬鹿で結構！だいたいね、客なんて  
のは揃いも揃って馬鹿ばっかなの！」

円「神宮司さん……」

神宮司「皆だつて分かつてる筈でしょう？客  
つていうのは、こつちが手取り足取り一か  
ら十まで説明してやらないと大人しく映画  
も観られない様な生き物なのよ！そのくせ  
クレーム言つて来る時だけは一丁前、御託  
並べて偉そうに、なら最初から『アレはこ  
うしろ、ソレはああしろ』って事細かく教  
えてやるべきなの、教えたって出来ない馬  
鹿もいるけどさ！こつちがどれだけ大変な  
思いをしてると思つてるのよ！毎日毎日イ  
ライラして、でも顔では笑つて対応して、  
でもあいつらは何も気付かないで自分の注

文ばっかり、何一つ自分から動こうとしない！やって貰うことが当り前じゃねえんだよ！ああもう！本当に腹立つ！」

しばしの静寂。

荒くなった神宮寺の息が徐々に落ち着く。

円「神宮司さん……？」

神宮司「……はい」

円「悪いけど、ここはあなたのお家じゃないのよ？」

神宮司「……ごめんなさい」

円「神宮司さんのお気持ちは私も痛いほど分かります、人は時として仕事とプライベートの感情を分けることが出来なくなる生き物ですから」

神宮司「すみませんでした……」

円「もう謝らないで、貴方は何も間違ったこととは言っていないのだから」

神宮司「私は長島さんの意見に賛成です」

長島「……何だって！？」

神宮司「前言撤回します、小林くんが作ってくれた最初の原稿で問題ないと思います」

円「分かりました、私もそれで良いと思います、じゃあ少し休憩を入れて録音に移りましょう。それが終わったら、お食事にしましょうね」

神宮司「分かりました」

円「皆さんは何が食べたい？」

神宮司「私は・・・あ、いや」

円「どうぞ、神宮司さん」

神宮司「私は部外者ですから」

円「良いのよ、あなたは何が食べたいの？」

神宮司「出来れば、牛丼以外」

円「牛丼以外にしましょう」

神宮司「麺類とか」

円「異論が無ければ麺類にしましょう」

神宮司「はい、すみません」

円「では録音しちゃいましょう」

長島「ちよつと待った！僕は反対です」

円「え・・・何が？」

長島「いや、その・・・」

神宮司「別に私は麺類じゃなくても」

円「町中華の出前にしましょう、それなら麺もあれば丼もあるから」

長島「違う！神宮司さんが僕の意見に賛成することに僕は反対なんです！」

円「ちよつと何を言ってるか分からないわ」

長島「僕も前言撤回します！やっぱりお客様にはこれでもかと言うくらいに丁寧なアナウンスをするべきでしょう！」

円「せっかく終わりが見えて来たのに」

長島「お客様は数ある映画館の中からわざわざ当館を選んで来て頂いているんです、最大限、最上級のおもてなしの心は必要だと感じる様になりました、即ち、最初の原稿、あれはやっぱり書き直すべきです！」

円「どういう風に？」

長島「考えましょう！納得いくまで話し合おうじゃありませんか」

神宮司「みんな納得はしていると思うんですけど・・・」

長島「僕はそうは思わない！あなたの意見には賛同し兼ねる」

神宮司「そうですね・・・」

長島「あなたも一度首を突っ込んだからには、最後まで責任を持って話し合いに参加するべきだ」

神宮司「私は長島さんの意見を尊重します」

長島「それは困るんだってば！あなたの意見に反対するのが僕の仕事なんですから」

神宮司「それじゃあ話し合いが終わらないじゃないですか」

長島「やはり作品のタイトルと予告編の尺は伝えてあげるべきでしょうね、予告が何分あるか事前に分かっていたらお客様も安心するでしょう」

円「じゃあ、その部分は神宮司さんの意見を採用するのね」

神宮司「そういうことになっちゃいますね」

長島「違う！それだけじゃない、携帯電話という単語は電子機器に書き換えて下さい、今の時代はありとあらゆる物が光りますからね、ありとあらゆる物の電源は切って頂かないと」

神宮司「作品名、予告の尺、色々光る、他には？」

長島「トイレの場所」

円「トイレの場所・・・」

神宮司「本当に良いんですか？」

長島「やっぱりねえ、行けと急かしてるなら場所くらい教えてあげるのが筋つてもんでしょう」

円「それも元々は彼女のご意見なのよ？」

長島「僕の意見は違います、僕が案内するのは当館のトイレだけではありません、この建物にある全てのトイレを案内しようじゃありませんか」

神宮司「何でそんなことするんですか？」

長島「当館のトイレが一杯になってしまったらどうするんですか？他の階のどこにトイレがあるか分かっているお客様も安心だ」

円「そこまでする必要あるかしら・・・」

長島「我々のサービス精神は過剰なくらいが丁度良いんです！」

神宮司「分かりました・・・他には？」

長島「他には・・・そうだなあ」

神宮司「電源からお切り下さいの”から”については、どうしますか？」

長島「貴方は確か不要だと言っていましたね？」

神宮司「はい・・・」

長島「必要です！」

神宮司「分かりました・・・」

円「念の為に理由を聞かせて貰えるかしら？」

長島「日本語の美学ですよ、電源”から”お切り下さい、何だか良い響きじゃないですか、日本語として正しいか正しくないかは別として、僕はこの『電源”から”お切り

下さい』という言葉に日本語の美しさを感じます」

円「どうしたものかしら・・・」

神宮司「ここまで言ってるなら良いんじゃないですか」

長島「どうせならもっと使いたいですよね、『予告編は約十分』から”となっております。前の座席”から”蹴るのはお止め下さい。どなた様も、どうぞ最後”から”ごゆっくりお楽しみ下さいませ」

円「何だか意味が変わって来ちゃってる気がするんですけど・・・」

長島「あ・・・これは気になるな」

神宮司「どこですか？」

長島「この最後の、『どなた様もどうぞ最後までごゆっくりお楽しみ下さいませ』」

円「何かおかしいかしら？」

神宮司「特に問題は無いと思いますが」

長島「”どなた様も”って何ですか・・・」  
神宮司「お客様のことじゃないですか」

円「そうよ、長島くんの言葉を借りれば、たくさんある映画館の中からわざわざ当館を選んできて下さったお客様全員のことよ」

長島「何故お客様のことを」どなた様も」という言葉で一括りにしてしまうんですか、お客様にだって一人一人の人生がある、一括りにされて良い人間なんてこの世の中には誰一人としていない筈だ」

神宮司「長島さん、私が言うのもアレですけど、ちよつと考え過ぎじゃないですか？」

長島「お客様に対しておもてなしの心があるのなら」どなた様も」なんて悲しい言葉は使うべきじゃないんだ」

神宮司「じゃあ長島さんは、劇場にいる全てのお客様の名前を読み上げると仰るんですか？」

長島「悔しいけど、素晴らしい意見だ」

神宮司「止めた方が良いと思います」

長島「どうして！？誰だって自分の名前を呼んで貰いたいじゃないか、自分だけを見て貰いたいじゃないか」

神宮司「もしそんなことをすればお客様はきつとこう思う筈です『早く映画を観せろ』」

長島「どうしてもっと一人一人を見ようとし  
ないんですか・・・僕らは観客Aや観客B  
じゃない、一人一人、其々の人生があるじ  
やないですか、奇抜な奴だけが持て囃され  
て、地道に努力している人間はその他大勢  
として一括りにされて、目を向けてさえ貰  
えない、こんなことは間違ってるよ。何が  
“どなた様も”だ、僕は僕だ！世界に一人  
しかいない人間なんだ！僕はここにいる！  
何で皆、僕という人間を見ようとしてくれ  
ないんだ・・・」

しばしの静寂。

荒くなった長島の息が徐々に落ち着く。

神宮司「長島さん」

長島「・・・はい」

神宮司「頑張ってください、応援してますから」  
円「あら・・・小林くん、大丈夫？」  
神宮司「さっきからずっと俯いてるんですよ、  
かれこれ一五分くらい」  
円「具合でも悪いの？小林くん？」  
小林「・・・すみません」  
長島「小林くん、僕の意見をどう思う？」  
小林「クレイジーですよ」  
長島「何だって！？」  
小林「クレイジーですよ、揃いも揃って、皆」  
神宮司「えっ、私も！？」  
小林「当たり前でしょ、そういうところですよ」  
円「私も・・・？」  
小林「支配人は別に・・・いや、この二人と  
真面に話せてる時点で十分にクレイジーか  
もしれませんね」  
長島「先輩に向かって何だその言い方は」  
小林「何が先輩ですか」  
長島「何だと？」

小林「あんたは本業で稼げてないからバイトで食い繋ぐしかない、しがないフリーターじゃないか！」

長島「何だと！」

円「小林くん！今の言い方は失礼です！幾ら正論であつたとしても！」

長島「雇用形態は関係ない筈だ！」

小林「長島さんねえ、ハッキリ言いますよ、貴方の生き方は痛いんだよ、貴方は痛い大人なんだよ！」

長島「人間の生き方に正解は無いんだ！お前は俺の何を知ってるって言うんだ！」

小林「引くに引けなくなってるじゃないか」

長島「僕はこの劇場のことを思って、お客様のことを思って話し合いをしているんだ」

小林「貴方は議論に参加しているふりをして、結局は自分を見て貰いたいだけなんですよ、だから途中で理屈が破綻してしまうんだ」

長島「議論の進め方に正解は無い！」

小林「何なんですか、二言目には正解は無い  
正解は無いって、貴方はそれしか言えない  
のか！」

長島「だって正解は無いじゃないか、自分の  
確固たる正解を持っていたって、その正解  
は必ず誰かに否定されるじゃないか」

小林「正解はあるんですよ、世の中には、た  
くさんの正解があるんですよ、どうして皆  
自分の正解しか信じようとしませんですか」

長島「君は未だ若いから分からないんだよ、  
自分の価値観を否定されることがどれだけ  
辛いかな」

小林「価値観は否定して頂きましたよ、今日  
だけで散々」

長島「君は考えが甘いんだよ」

小林「貴方は”正解は無い”という言葉を使  
って自分自身を正当化してるだけだ、それ  
は嫌味な客が事ある毎に”俺は客だぞ”と  
言ってくるのと同じ理屈なんだ！」

SE・部屋を出て行く足音と扉の閉まる音。

長島「真面目な人間だと思ってたのに」

神宮司「長島さんは、どれだけ小林くんのことを知っているんですか？」

長島「」

円「小林くんはね、学生時代に小説家を目指していたのよ」

長島「そうだったんですか・・・」

神宮司「聞いたこと無かったんですか？」

長島「知らなかった・・・」

円「来る日も来る日も書き続けてコンクールへの応募を続けたけど、鳴かず飛ばずだった。大学四年生の時に、これで駄目なら潔く諦めようと決心して書き上げた作品が小林くん史上の最高傑作になった。それでも結果は出なかった。小林くんは自分との約束を守る道を選んで就職活動を始めた」

長島「何だか・・・勿体ないな」

円「会社を見付けるのにも苦労した。何せ周  
りよりずっと遅れて就職活動を始めたもん  
だからね。面接に行っては落とされ続ける  
日々。これじゃあ小説が面接に変わっただ  
けで、自分が必要とされていない事実には  
何一つ変わりがない。やっとの思いで或る  
会社に就職が決まったけど、職場環境に馴  
染めなかった。それでも彼は必死に頑張っ  
た、でも、とうとう体と心まで壊して会社  
を辞めた。それからバイトに、派遣社員に、  
色々経験して、半年前にうちに来た。小林  
くん言ってたの『やっとな自分に合った職場  
を見付けることが出来た』って。相当、辛  
い時間を過ごして来たんでしょよね」

神宮司「知りませんでした」

長島「ちよつと言い過ぎたな・・・」

円「・・・っていう経緯をもし彼が持ってい  
たとしたら、貴方達はどう思う？」

神宮司「えっ？」

長島「それは、どういう意味ですか？」

円「そのまんまの意味よ」

神宮司「今の話は、支配人の作り話？」

円「どうでしょうか、信じるか信じないかは  
貴方達次第」

長島「真実か否かによって僕達の感情がだい  
ぶ変わってくるのですが・・・」

円「あら、どうして？」

長島「どうしてって・・・当然でしょう」

円「他人のことなんて、そう簡単には分から  
ないものよ、どうせなら、優しい想像力を  
持ちたいものね」

神宮司「私は信じます・・・いや、どうしよ  
うかな」

長島「果たして面接でそこまで話すか、僕に  
は疑問なんだよなあ」

神宮司「私もそう思うんですよ、でも話の内  
容は妙にリアルだったからなあ・・・」

円「ゆっくり考えて頂戴」

× × ×

SE・自販機から飲み物が落ちる音。

ごくろごくろと飲物が喉を通る音。

円「小林くん、大丈夫？」

小林「支配人、すみませんでした」

円「それは、言う相手が違うんじゃない？」

小林「分かってます・・・」

円「じゃあ、戻りましょう」

小林「支配人、僕は嬉しかったんです。支配人から直々にアナウンス原稿の執筆を頼まれて、あの頃の時間が無駄では無かったんだって、初めて自分で自分を認めることが出来ました」

円「認め続けてあげれば良いじゃない」

小林「僕は皆さんが羨ましかった。皆さんには他人には無い強い個性がある。皆さんは僕の憧れでした」

円「個性の無い人なんていません」

小林「此処にいるじゃないですか」

円「小林くんにだって、小林くんにしかない個性はある筈です、絶対に」

小林「じゃあ何ですか？僕の個性、僕が持っている他人には無い個性って、何ですか？」  
円「そうねえ・・・うーん・・・あつ・・・うーん・・・そうだなあ・・・」

小林「もう結構です」

円「貴方は此処に来て未だ半年じゃない。これからよ、これから貴方の個性が表に出て来る時は必ず来る。それが観客の誰か一人を幸せにして、二人、三人と広がって行く。そんな日が必ず来るわ」

小林「此処での時間は本当に楽しかったです。この映画館で働いたことは、数少ない僕の誇りです。ありがとうございました」

円「小林くん・・・」

小林「僕はもう決めたんです」

円「そう、じゃあ最後に私の話を聞いてくれるかしら？」

小林「何ですか？」

円「私がこの映画館で働き始めたのは三五年前です。丁度いまの貴方の歳の時ね。最初

は私もアルバイトとして入って、契約社員になって、正社員になって、十年前に支配人になりました。今まで何人の方が入っては辞めて行ったでしょう」

小林「それは前にもお聞きしました」

円「映画館で働きたいと思っている人は、大抵の人達が無かしの夢を持っていた。役者になりたい、監督になりたい、脚本家になりたい。本当に十人十色」

小林「それが何ですか・・・」

円「中には夢を叶えた人もいるけど、その他大勢の人達はどこかで自分に踏ん切りをつけて此処を辞めて行った。その中には、きっと、あと一歩進めば夢に手が届いたのにという所で引き返してしまった人も少なくなかったと思うの。もし去年辞めて行った彼がそうだとしたら、もしあの時の彼女が、そう考えると、お婆ちゃんは何か、何とも言えない気持ちになってしまふのよ」

小林「何でそんな話を僕に？」

円「時には往生際の悪さも大事だと思ってね」

小林「僕の気持ちは変わりません。申し訳ありません」

円「それなら、最後に二人には謝った方が良  
いんじゃない？大人として、上司として」

小林「・・・はい」

円「そして、今日の仕事は最後まで終わらせ  
なさい」

小林「分かりました」

× × ×

円「皆さん、小林くんからお話があります」

小林「皆様、ええと・・・先ほどは大変、

申し訳ありませんでした」

神宮司「此方こそ、ごめんなさい」

長島「僕も少し言い過ぎたよ」

小林「お気になさらないで下さい。それで  
すね、一つ皆様にお伝えしたいことがあり  
まして、色々と考えたんですけど、僕は、  
この度このシネマ・サンライズ浅草橋を、  
S E ・腹の鳴る音、大きく響く。」

円「あらやだ！」

神宮司「ごめんなさい！もうお腹が限界で、

ごめんね小林くん、続けて」

小林「はい・・・あの、僕はこの度、」

長島「駄目だ！俺も限界だ！」

小林「あの、一言だけ」

長島「腹が減り過ぎてお前の言葉が全く耳に入  
入って来ない」

円「それは大変、早くご飯にしましょう！」

小林「支配人、話が違うじゃないですか」

円「だってこの二人をご覧なさいよ」

神宮司「嗚呼・・・意識が遠くなつて来た」

長島「俺は体が震えて来ている・・・」

小林「これだけは言わせて下さい！僕は、」

長島「小林！とりあえず座れ」

小林「長島さん・・・」

長島「俺達はちよつとお前に聞きたいことが

あるんだ、それを済ませたら幾らでも話を

聞いてやる。だから座りなさい」

小林「もう・・・」

長島「なに食べます？」

円「神宮司さんが確か麺類が良いのよね」

神宮司「あ、私は別に何でも」

円「長島くんは？」

長島「僕は何だか麺類が食べたい気分ですね」

神宮司「あら長島さん、奇遇ですね」

長島「別に合わせた訳じゃありませんよ」

円「じゃあ、麺類にしましょう」

神宮司「ありがとうございます」

長島「仕方ねえなあ」

円「皆さん、麺類といえば何ですか？ちなみに私はお蕎麦なんですけど」

長島「僕はラーメンですね、これだけは譲れない」

円「神宮司さんは？」

神宮司「パスタですね」

長島「それ括りとしてはイタリアンじゃないですか？」

神宮司「パスタだって麺類ですよ」

長島「納得いかないね、神宮司さんの意見には無理がある、麺類にしようって時にパス  
夕頼む人います？普通はラーメンでしょう」  
神宮司「とことん話し合いましたよ」  
長島「何時間でもやりますよ」  
円「小林くんは、麺類といえなに？」  
小林「僕は・・・パッタイですかね」  
神宮司「えっ・・・？」  
長島「パ・・・何だって？」  
小林「麺類と言えば、普通はパッタイじゃないですか？僕はそうやって育ちましたけど」  
円「小林くん、それはとてつもなく个性的よ」  
小林「・・・ありがとうございます」  
神宮司「駄目だ、もうパッタイが頭から離れない」  
円「どなたかパッタイの出前が出来るお店を知ってる人はいるかしら？」  
神宮司「調べます！」  
長島「僕も調べます・・・いや、駄目だ！やっぱり麺類と言えばラーメンだ」

神宮司「パツタイ出前、パツタイ、パツタイ」

長島「神宮司さん、落ち着いて！」

円「私は何だかパスタが食べたくなって来たんですけど」

長島「支配人、そんな無理矢理に話を面白くしないで下さい」

神宮司「パツタイパツタイパツタイパツタイ」

長島「戻って来て神宮司さん！」

小林「皆さん・・・話し合いましたよう、ゆっくり、時間をかけて、麺類と言えは何か」

へ了